

| | |
|------------------|---|
| Title | 安田文庫蒐集古鈔本『論語集解』について |
| Sub Title | The collection of Yasuda bunko "Lun Yu Ji Jie" manuscript in Muromati era |
| Author | 高橋, 智(Takahashi, Satoshi) |
| Publisher | 慶應義塾大学藝文学会 |
| Publication year | 2004 |
| Jtitle | 藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.87, (2004. 12) ,p.1- 23 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 岡晴夫教授退任記念論文集 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00870001-0001 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

安田文庫蒐集古鈔本『論語集解』について

高橋 智

一、序言

二、日本に於ける古刊・古鈔本『論語』の概略

三、古鈔本『論語』の現状

四、安田文庫旧蔵古鈔本『論語集解』解説

五、結語

一、序言

古鈔本とは写本の時代であった日本の室町時代以前に博士家、縉流、武家等の手によって講読のために書写された外典（仏典以外）を特に指して言う日本の書誌学用語である。中国でいえば元明時代に相当し、宋元以来の善本を留学や

貿易を通じて盛んに輸入した時代である。そして、それら中国の刊本を写し校訂し訓読したのである。従って、古鈔本は中国から言えば、既に亡逸した宋元版の姿を見ることができるといふ価値を有し、日本から言えば、中世期の漢文訓読の様子を考究できるわけで、古鈔本は文献学史上特異な位置を占めているのである。かつて網羅的に『論語集解』古鈔本を整理したものに、大正二年第七回釋奠を記念した『論語書目』（孔子祭典会）、昭和六年大阪府立図書館『論語善本書影』、昭和十年斯文会『論語秘本影譜』、昭和初期、大橋図書館『論語展覽会目錄』等があるが、これらによって知られる昭和の初め頃の『論語集解』古鈔本の蒐集は、岩崎文庫（現東洋文庫）九部、徳富蘇峰（現お茶の水図書館）八部、安田善次郎氏三部・宮内省・帝国図書館・神宮文庫・高木利太氏各二部等となっていた。戦後の移動や新出による増加はあるが、古鈔本『論語』研究の基礎はこの頃に定まったわけで、民間による蒐集努力を物語っている。

安田文庫は、安田財閥二代安田善次郎の蒐集に係る和漢の膨大な貴重書からなる個人文庫で、昭和十一年文庫主の没後、散佚したと言われる。その質と量は計り知れず、旧安田文庫の内実の復元は日本の書物史の大きなテーマであると言えよう。川瀬一馬博士の調査書目をもとにした岡崎久司氏の「旧安田文庫蔵書の復元」（大東急記念文庫『かがみ』三二―三三、平成十）はこのテーマの最大の拠り所である。『論語』研究のみに限らないが、安田文庫の恩恵無くして古刊古鈔本の研究は進展しないと云っても過言ではない。

二、日本に於ける古刊・古鈔本『論語』の概略

『論語』の中国・日本に於ける受容一般については、林泰輔博士『論語年譜』（大正五、大倉書店）に詳しく述べられているが、応神天皇の十六年、西暦二八五年に百済の王仁が『論語十卷』『千字文一卷』を日本に伝えたと言う記事が、

『古事記』また『日本書紀』に見られ、これより日本での『論語』講習が始まったとされている。現存する『論語』のテキストは、漢の馬融（七九～一六六）・鄭玄（一二七～二〇〇）等の注するもの、魏の何晏（一九〇～二四九）がまとめた『論語集解』、梁の皇侃（四八八～五四五）の注する『論語義疏』、宋の邢昺（九三二～一〇〇三）が集解本を敷衍した『論語注疏』、が主たるものであったが、南宋の朱熹（一一三〇～一二〇〇）の『集注』本が出現して以来は、『四書集注』本としての『論語集注』が集解本を凌駕することとなった。従って、日本に於いては、上古より中世までは集解本と義疏本が読まれ、近世以降は主として集注本が読まれたと言う大まかな区別が常識とされるが、遑って、王仁の『論語』が如何なるテキストであったのかは、定かなところではない。その後、平安時代の状況も遺物なく知れるところではない。鎌倉時代になつてはじめて、明経博士、中原家・清原家が用いていた古鈔本の現存が確認され、集解本の古い読習を伺うことができる。（中原家本は、醍醐寺・東洋文庫・高山寺等に存し、清原家本は書陵部・東洋文庫・大東急記念文庫に存する。研究は武内義雄博士『論語之研究』（昭和一四・岩波書店）の「本邦旧鈔本論語の二系統」〔「正平版論語源流攷」（昭和八・大阪府立図書館）からの抜粋〕に詳しい。南北朝時代は、確たる博士家のものは却つて現存せず、博士家の証本と断定はできない古鈔本が幾つかを存し、論語読習の流布の一端を示している。その後、古鈔本は十五世紀頃にあつて伝本を幾つか見るに止め、やや降つて室町時代十六世紀になると清原家の中興も相俟つて、古鈔本の現存は俄然多くなる。その間、正平十九年（一三六四）には堺で『論語集解』が出版、現存するだけでも双跋本二種・単跋本・明応覆刻版と四種の版が確認され、最古の『論語』古版正平版論語として一世を風靡した。昭和八年大阪府立図書館が同館の初刻本を影印した際に附した長田富作等の解説にその価値が詳述される。降つて、天文二年（一五三三）清原宣賢の監修で阿佐井野氏が注を省いた単経集解本（天文版論語）を出版した。こうして古鈔本と二種

の版本が学僧・郷紳に享受されて室町時代を終える頃、朝鮮の活字印刷文化の影響を受けて、木活字印刷による、所謂古活字版『論語集解』の出版が続いた。活字版が三種、それに準じた整版が二種、隆盛を極めたと云わねばならない。拙著『慶長刊論語集解の研究』（斯道文庫論集三〇・三一・平成八・九）を参照。江戸時代の後期に俄に勃興した考証学は、これらの古刊古鈔論語の再検討を促し、市野迷庵（明和二〜文政九）が文化年間正平版論語の校勘記を作成、吉田篁墩（延享二〜寛政十）が寛政年間に『論語集解考異』を著した。また、狩谷掖斎（安永三〜天保六）等の書物鑑定会が編纂した『経籍訪古志』はその書誌学上の成果であった。

翻って、『論語義疏』は室町時代の中期以降に比較的多くの古鈔本を存し、室町時代にあつて、『論語集解』本に相当な影響を及ぼしていたと見られる。足利学校に存する古鈔義疏を寛延年間に根本武夷が翻刻し、『四庫全書』に収載されたことは周知の事実で、近代になって、大正十三年武内義雄博士が校勘記を作成し、懷徳堂からこれを出版した。

このように、日本に於ける『論語』古刊古鈔本の研究は、より時代の古いものについては、ほぼその成果を尽くし、その一定の意義を明かにしていると言える。しかし、読修の課本として一般に流布していた室町時代の古鈔本は、その多さと多様な写本形態を持つ故に、未だ十全な分析と整理が加えられていない恨みがある。書写の実態を比較調査するために必要な、諸本を一堂に会する機会が得難いことが、その最大の原因である。この点に留意尽力した安田文庫の蒐集は、まさに文献学にとつての救世主であつたと言えるよう。

以上述べた総合的『論語』の文献史概説は、『漢文大系』の「四書解題」（服部宇之吉）、博文館漢文叢書『論語』（大正二）の久保天隨の解説、明治書院『論語解義』（大正五）の簡野道明の解題、国書刊行会『論語総説』（藤塚鄰・昭和二四）があり、図版解説は前述『論語年譜』が便利である。

三、古鈔本『論語』の現状

一部残存する唐写本等は別にして、日本に現存する『論語集解』古鈔本の数は、『本邦現存漢籍古写本類所在略目録』（阿部隆一編・同著作集〔汲古書院・昭和六十年〕）によれば九十点に及ぶ。勿論この数は近世以降の版本現存の数に比すれば寥々たるものではあるが、経部から集部までの四部現存古鈔本のなかでは、他書よりもその多さは抜きんでている。前述の通り、その一割が南北朝時代以前の写本で、九割は室町時代、しかも中期以降のものである。中心となるのは清原宣賢（文明七〜天文十九）が永正年間（十六世紀初）に施した訓点である。故に、清家点と称するのは事実上、宣賢点を指して言う。従つて、訓点から見れば、この宣賢点本から派生した写本とそれ以外（寺院等による緇流の系統）のものとは大別される。更に、本文系統から見れば、当時、同時に読まれていた『論語義疏』が一部混入している系統のものが少なくなく、これを義疏竄入本として分類する。清家伝来のもの以外に多いようである。総じて、中世期の『論語』講読は、博士家の密室的秘伝が時代とともに開放流布に向かい、さほど嚴格ではない抄写訓読が流行し、煩雑な『論語義疏』をも適宜導入し、融合的な独自の写本文化を形成するものであった。それはまた、『論語抄』等の所謂抄物講説の流行をも生み出す原点でもあった。即ち、

清家点本 —— 宣賢点本 —— 伝鈔本

正平版論語 —— 天文版論語

寺院系諸本（義疏竄入本）

以上のように概観されよう。こうした流れは現存する一点一点の古写本を精密に調査して得られる結論であるが、実

際に安田文庫蔵本は、室町時代の『論語』講習を一手に把握できるほどの鑑識眼を経て蒐集されたものであった。以下にその具体例を見てみよう。

四、安田文庫旧蔵古鈔本『論語集解』解説

先ず、清原博士家の訓点を移点したものをから挙げる。

論語十卷 魏何晏集解 室町時代末期・三十郎盛政 写 二冊 斯道文庫現蔵(091/ト10)

本書は『論語善本書影』(大阪府立図書館 昭和六年)の第三十九に載せたもので、清原博士家の訓点の証本として、安田文庫中、最も価値ある伝本である。夙に、『経籍訪古志』に紹介された求古楼狩谷校斎の旧蔵になるものである。『経籍訪古志』が編纂された幕末の当時、『論語』古鈔本は十四本が著録され、その殆どが求古楼の所蔵であった。まさに安田文庫は求古楼の再来であった。本文共紙の元表紙に縹色の覆い表紙を加える。包背装の形をとるが、背に糊付けはしていない。室町時代末期(十五・十六世紀頃)に流行した装丁である。外題は、元表紙に「論語 一之五」「論語 六之十」と墨書する。本文と同筆かほぼ同時代の筆であろう。覆い表紙には題箋(室町期)があり、「論語 六之十何晏集解」と墨書し、第一冊は題箋が剥落し朱筆の異筆で、「論語 一之五」と記す。首に「論語序／叙曰漢中壘校尉劉向……」と、魏何晏の序が三丁ある。本文は「論語学而第一(低三格)何晏集解」と題し、次行から「子曰学而時習之不亦説乎」と始まり、何晏の注解は小字双行で書写される。ただし、卷二以降は、「論語為政第二 凡二十四章 何

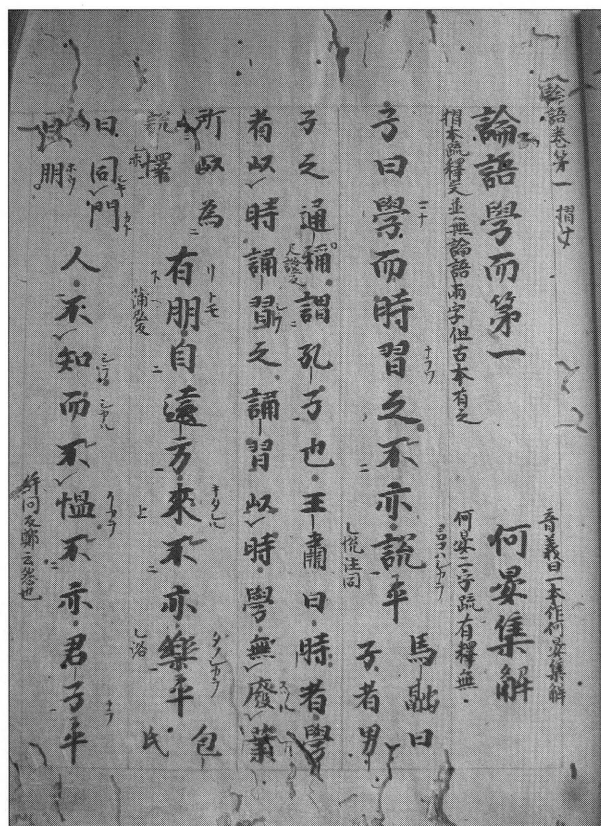


図1 三十郎盛政 写本

晏集解」と章数を記す。第七は、「論語述而第七 旧三十九章／今三十八章 何晏集解」、十一は、「論語先進第十一 鄭二十三章／皇二十四章 何晏集解」と題す。

薄墨による墨界を施し、单边有界、每半葉五行十四字、界の高さは二十・四糎、半面の界幅は十六・四糎、毎行の幅は三・三糎である。実にゆつたりとした読みやすい配字である。柱には何も記さず、墨付きが第一冊九十二枚（序を除く）第二冊百七枚である。料紙は薄手の斐楮交漉紙。尾題は「論語卷第一 經一千四百七十字／注一千五百一十五字」と各巻末にあり、巻第十まである。巻十の副紙に本文と同筆で、書写奥書を記す。「右本清家秘点也則雪庵道白真筆写之／三十郎盛政（花押）／墨印」と。三十郎盛政が清原家の秘本である雪庵道白の真筆本を写し取ったものである、と。雪庵道白は清原枝賢の法名。室町時代の清原家は、宣賢を中興の祖とし、枝賢、国賢、梵舜、秀賢と代々『論語』の訓読が継承された。

清原宣賢（文明七〜天文十九）の点本——京都大学に令写本に自筆の訓点を付す単經本（存卷六〜十、1-66-

ロ—8）大阪府立図書館に釈梅仙写 永正九年宣賢奥書本

清原枝賢（永正一七〜天正一八・宣賢の孫）——京都大学に天文五年令写本（1-66-ロ—5、1-66-ロ—8と同筆）京

都大学に天文十九年奥書単經本（清原良枝書写本と言う。良枝は鎌倉時代建長五年〜元弘一年。1-66-ロ—6）

清原国賢（天文十三〜慶長十九・枝賢の男）——前田育徳会尊經閣文庫に慶長六年の国賢元奥書を遺す慶長古活字

版『論語』

釈梵舜（天文二十二〜寛永九・宣賢の孫）——京都大学に元龜二年書写本（谷村 1-66-ロ—1）、宣賢点を写す。

また、梵舜の父、吉田兼右（宣賢の男）に宣賢点の書写本あり

（天理大学付属天理図書館）。

清原秀賢（天正三〜慶長十九・国賢の男）——静嘉堂文庫に慶長八年瀧川忠征が慶長古活字版に秀賢点を写し取

つたものあり（8183-2-101-20）。

以上のような現存本による清家の継承を確認できるわけだが、本書はその枝賢本の流れを汲む貴重な証本である。

さて、清家本が、正平版論語と密接な関係にあることは、武内義雄博士の「正平版論語源流攷」に詳しいが、南北朝時代以前の古い清家の写本を祖として正平版が出現したことは疑いの無いところで、正平版よりも後発に当たるこうした室町時代の清家写本が、こんどは正平版を祖として生まれて来ると考えるのは極めて自然であり、実際、字句の異同も正平版に近い。しかし、室町時代の古写本は、様々に出現するテキストの影響を受けながら、複雑に校訂が加えられ、

一概に系統を定めがたい実情があり、正平版との関係は、大まかな同一系統と言えるぐらいで、確かな関係を断定することはできない。

三十郎盛政は、阿部隆一博士の考証によれば、国賢の門人であるという。書写は一筆で、本文、訓点ともに同一人が同一時に一気に写し取ったものである。訓点の内容は朱のヲコト点、墨の返り点・送りがな・縦点・附訓・声点・濁音符・音注・校合（正・オ・イ・本・摺・古本・音釈）である。京都大学の天文五年枝賢令写本（Jōgorō）と字様もよく似、附訓や校合もほぼ同じ内容で、同一の祖本を持つものと判断される。本書のほうが校合の項目が多い。印記は、「月の屋」（横山由清）「安田文庫」が捺される。本書はまた、かつて財団法人大橋図書館が主催した「論語展観目録」の四十七番に著録されている。

論語十卷 魏何晏集解 室町時代写 清原宣嘉本 二冊 斯道文庫現蔵（092/ト4）

本書は従来の諸書目に未載である。江戸時代の初期頃に改装したと見られる縹色の表紙（縦二六・五横十八・七糎）に古い題箋を附し「論語何晏集解 天・地」と墨書する。本文の紙質墨痕から想像するに室町時代の中後期、即ち十五世紀末から十六世紀初がらみの書写年代ではないかと思われる。古写本としての風格は上乘と言えよう。首に何晏の「論語序」を二丁附す。巻頭題は「論語学而卷第一 何晏集解」と記し、卷二以降は「論語卷第二 何晏集解」等と篇名を記さず章数も記さない簡単なものとなっている。尾題も「論語卷第一」として第十まで、大小字数等の附属記述はない。

斐楮交漉紙に辺・界を墨書し、七行十四字注小字双行に書写する。界寸は縦二十一横十六糎、界幅は二・三糎。柱には何も記さない。本文の系統を鑑みるに、例えば、「学而」最終章、「不患人之不己知」に本書は「王肅曰但患己無能知之也」の注を附し、この一句は正平版以後の集解本（とくに清家本）には無いものが多く、『論語義疏』本はこれを存する。これは後述の、清家本以外の古写本に類似する系統を示す例証で、即ち『論語義疏』本の影響を受けたものの系統である。また、爲政篇の第三章「子曰導之……」を多くの集解本が「導」を「道」に作るのは正平版との一致を示し、逆に、第二十二章の注「小車駟馬車」の「駟」は正平版が「四」に作るのと相反する例である。従って本書は清家本とはいえ、正平版を含む家本の忠実なテキストを伝えたものではなく、自由な校訂を経た異質の清家本とすべきである。

卷四の末に「正長二年（一四二九）二月十四日読了（花押）」

卷五の末に「正長元年十一月二十八日以清原家秘本書寫了／即朱点墨点畢 少納言藤原朝臣（花押）」と、本文とは別筆の奥書があり、書写奥書ではなく、別本から写し取った奥書である。

本文への書き入れは、墨の返り点・送りがな・縦点・附訓が本文と同筆で、後に、朱筆の句点・ヲコト点（少々）・附訓等が別筆で加えられている。訓法を「述而篇第七」を例に見てみると、

○「述べて作らず」（清家本）「述して作せず」（本書）

○「徳を脩めざる、学を講ぜざる、義を聞きて従うこと能はず、善からざるを改むること能はず」（清家本）

「徳を脩めず、学を講ぜず、義を聞きてうつること（従うこと）能はず、善からざるを改むること能はず」（本書）

○「道をねがひ」（清家本）「道に志し」（本書）

○「執鞭の士といふとも吾亦為ん」（清家本）「執鞭の士といふとも吾亦之を為ん」（本書）

○「威あつて猛からず、恭にして安し」（清家本）「威あつて猛からず、恭し（恭にして）ふして安し」（本書）
となつて、（一）内の朱筆は清家の読みと踏襲するものの、墨筆の訓はやや清家点と異なり、後述の清家本以外の訓点に近いものがある。

「澤殿／蔵書」印記を捺し、清原宣嘉の旧蔵であることを示す。宣嘉は舟橋庶流家の澤宣嘉、天保六く明治六（一八三五く一八七三）。静嘉堂文庫に澤宣嘉書き入れの古活字版の「孟子」（A種c）を存し、幕末に經書の講読を継続した清原家の学者であつた。本書の正長の元奥書は、即ち宣嘉の書き入れの可能性がある。従つて、本書は、第一冊首の墨印が示す旧蔵者（不明）の古写本を澤氏が入手して読習したもので、元来清家に伝わつたものでは無い可能性が高い。本文や訓点の純粹な清家本との違いは、そうした原因によるものかもしれない。ここでは、旧蔵者をとつて、暫く清家本の分類しておく。

安田文庫の蔵印を捺す。

次に博士家の伝来ではないと判断されるものについて、挙げてみよう。

論語十卷卷五以下缺 魏何晏集解 応永三十三年（一二二六）写 広橋家旧蔵 一冊 斯道文庫現蔵（092／ト5）

本書は従来の書目等に未載のもので、書写年代も古く、書写字様も古き様式を止めている。本書が安田文庫に入った経緯について、末尾に薄様の副紙一葉を附して、川瀬一馬博士が次のように墨書している。

「昭和十年十一月中旬神田某書肆（洋本をひさぐもの）より応永の奥書有る論語あれば持参すべしとの状来る。直ちに赴き見るに烏丸家の反古より索め出でたるとして本書を示さる。零本なる事は惜しむべしと雖も、応永の筆なる事疑う可からざる。よりてこころみに其反古を出さしめて検するに、烏丸にあらで、実は広橋家なり（広橋家の旧蔵書は一括して東洋文庫にあり）。本書もと二冊にして第一冊の巻首を缺ける上、表帙をも失し、第二冊は表帙存せしなれど、凡て虫損甚しければとて、時に、張込帳二帖に改装せられ極めて不都合なる体をなししかば、まづ冊子に復元す可きをすすめぬ。告るところの價また我が意を得ざりしも、ややありて、我が言に従へるを以て、三日の後を約して去る。後日、文庫主人の許を得て、乃ち之を求む。命ずるか如く改装成りて、本日文庫に納むるに当り、本書所獲の次第を附記すと云爾。昭和十年乙亥十一月二十二日 安田文庫に於いて 川瀬一馬識」

広橋家は藤原氏日野家支流の名家。虫損甚だしく反古紙に混じっていたため流れたものである。残存の茶褐色の元表紙（縦二十五・三横十八糎）を用いて一冊に改装。総裏打ちを施す。「四之内」と古い墨書があり、或はもと四冊であったか。また、「承益」とふるい所持署名を墨書する。首の何晏の序を欠き、卷第一学而の第二章「有子曰、其為人也……」の「曰」からを存し、それ以前が缺している。また、子罕第九から堯曰第二十、乃ち卷五く十も缺する。単辺有界（縦二十・八横十五・二糎、毎行の幅二・五糎）六行の墨界に毎行十三字で小字双行に書写し、全卷一筆である。柱には「一卷 四丁」等と、卷数・丁数を墨書する。料紙はやや厚手の楮紙を用い、墨色濃厚、字勢有勁、まさに南北朝書写本の遺風を感じ取ることができる。

首題は「論語爲政第二 何晏集解 凡二十四章」という体裁。但し、述而第七は「論語述而第七 何晏集解 旧三十九章／今三十八章」と題す。尾題は「論語卷第一 經一千四百七十字／註一千五百一十三字」等と字数を記す。

巻第四尾題の後に次の、本文と同筆の書写奥書を存する。

「皆応永三十三季龍集丙午正月下澣／青華道人書于／防州白松大林蘭若客軒之下」

この奥書の左下に「主慶倍」「承益」というそれぞれ別筆で、本文とも別筆の署名がある。

本書の由来を想像する時、中世周防国の大内氏による文化事業を思わずにはいられない。平安時代末より周防の国を領した大内氏は、義弘（一三五六―九九）の時、朝鮮を通じた貿易で栄え、応永の乱で敗死するも、弟の盛見（一三七七―一四三二）が『藏乘法数』を応永十七年（一四一〇）に刊行するなど、所謂大内版の名で知られる出版文化事業を担っていた。盛見はまた、香山国清寺を建立して兄義弘の菩提を弔った。国清寺は「香山常住」の墨印を捺す宋元版を多く所有し、今、各地に散在してしまったが、大内氏が日明・日朝貿易によって如何に多くの貴重圖書を購入していたかの一端を伺い知ることができる。こうした富裕な文化を背景に持つ故に、京都から、学問に下向する学者も多かったと言われる。『五山版の研究』（川瀬一馬）の「室町初期に於ける開板」の章にこの事情は詳しい。『論語』に関して言えば、正平一九年（一三六四）頃に堺で初めて刊刻された（正平版論語）事実とさほど時を経ていない書写に係る本書は、この頃の『論語』需要の伝播を如実に語る遺品であると言えよう。識語中、白松は瀬戸内海に面した阿知須町・宇部市の近辺を指し、大林蘭若という禅僧の元へ寄居した青華道人がここで書写したのである。

本書はただ、テキストの由来を明かにせず、爲政篇の第三章「子曰導之……」を多くの集解本が「導」を「道」に作り、第二十二章の注「小車四馬車」の「四」は多くの集解本が「駟」に作るの等は本書と正平版の一致を示し、『論語義疏』本の影響を受けた可能性も無しとしないが、字面、字句の異同等からして、やはり、正平版『論語』の写しである可能性が高い。本書への訓点の書き入れは、朱墨の二種あり、朱筆の方がやや古いか。朱はヲコト点と返り点送り

がなを併用する。墨は返り点送りがない附訓に校合や音注がある。少々上欄に墨による補注がある。おしなべて、清家点に依るが、置き字（「之」など）を本書は訓読する等、厳格な博士家点ではない。

「安田文庫」の蔵印がある。

論語十卷 魏何晏集解 室町時代写 青蓮王府本 五冊 斯道文庫現蔵（092／ト5）

本書は、『論語善本書影』（大阪府立図書館 昭和六年）の第四十一に載せたもので、財団法人大橋図書館が主催した「論語展観目録」の四十六番に著録されている。所謂、青蓮院本古鈔論語集解、である。第一冊の扉副紙、並びに第二冊目以降の各冊首（公治長第五・子罕第九・子路第十三・陽貨第十七）に「青蓮／王府」の四方大印を捺すので、かく称されている。室町時代の儒学の趨勢は、清原博士家を中心とした公卿学士の大いなる牽引力によって、武士等の新たに興隆した新勢力をも教化して、公家秘本の文化を開放に向かわしめたところに大きな特徴を見ることができるのであるが、依然、上古以来の学問の旧勢力たる寺院学僧の蒐書講読は、学术界を支える動かしがたい実力を有していたことは申すまでもなく、加えて、彼らが、これら公卿学士勢力と明に暗に接点を持していたことが、中世の儒学に空前の活況を実現せしめた要因の一つであろうと想像されるのであって、『論語』講読の博士家伝本の現存と、かかる寺院所伝の古鈔本の現存状況が、そうした当年の儒学界の動向を如実に物語る証左である点、本書の如き由来の確かな優れた完本の存在の価値は、一言を以て之を蔽うことはできぬ奥深いものがある。毎冊の末に「靖齋／図書」の印があるのは、国学者谷森善臣（一八一七—一九一）の旧蔵を示す。谷森は伴信友の門下で、明治に御用掛として皇室系譜の調査等

に従事したことから、或はこうした伝本を所持したものであろうか。

縹色の古表紙は原装。縦二十六・二横二十糎。第一・三冊のみに元題箋を存し、「論語 自一／二」「論語 自五／至六」と室町期の墨書がある。各冊に二卷四篇ずつを配す。何晏の「論語序」を二丁半、首に附す。乃ち墨付き三枚目裏葉から、「論語学而第二」と題し、「子曰学而時習之不亦悦乎」と本文が始まり、注釈は小字双行にて記す。墨付きは第一冊から、それぞれ、三十二・三十八・四十一・四十五・三十枚である。無辺無界の六行十三字。字面の高さ約十八・五幅約十五糎。柱は何も記さない。料紙はやや厚手の斐楮交漉紙を用いる。墨痕鮮やかで、全冊、一気呵成の一筆である。

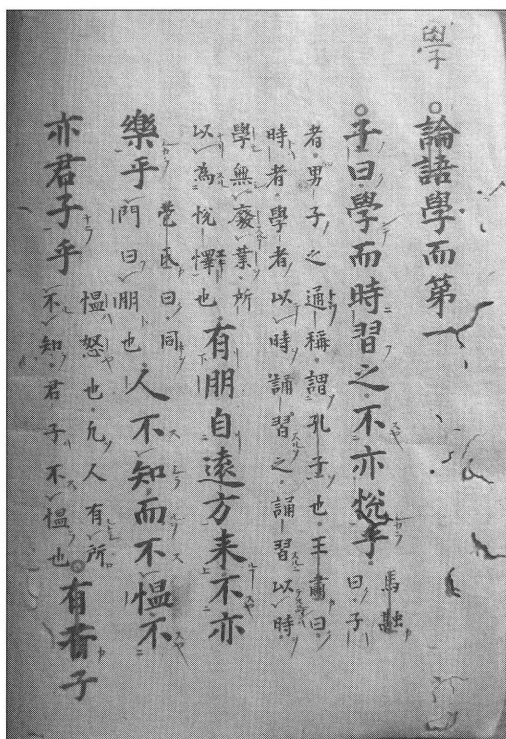


图2 青蓮王府本

卷題は第一篇_{学而}と第十五篇_{衛靈公}は同様の体裁で、書名のみ。第二篇以降「論語爲政第二 何晏集解 凡二十四章」と第二十までを題し、第七は「論語述而第七 何晏集解 旧凡三十九章／今三十章」第九は「論語子罕第九 何晏集解 旧凡三十一章／皇皇三十章」第十九は「論語子張第十九 何晏集解 凡二十四章／凡二十五章」と題す。また、尾題は「論語卷第三 經一千七百十一字／註二千八百二十字」の如く、毎卷末に字数を添えている。

先の広橋家旧蔵本同様、字句の異同や、字面の様子からして、正平版『論語』の系統を引くものであることは疑いを入れない。ただ、「学而」最終章、「不患人之不己知」に本書は「王肅曰但患己無能知之也」の注を附し、この一句は正平版以後の集解本には無いものが多く、『論語義疏』本はこれを存する。こうした例から、本書は、正平版の系統に依りながら、義疏本の影響を受けている一本であると判断できる。『論語義疏』は中国に古く亡んで日本にのみ写本が伝来した。しかし、その伝本も室町時代を遙かに遡る古いものは伝存せず、集解本と平行して書写されて来たという経緯がある。果たして、義疏本は集解本との関連を別に置いて論じることができない所以であるが、いずれにもせよ、当年の学士たちは、中世とは言え、狭い見識にとらわれない開放的な柔軟性を以て、校合を行い、儒書の講読に当たっていたことを物語る事実と言えるだろう。

本書の本文並びに注解の字体は、『古文尚書』に見るが如き異体を多く存し、それが、依拠せるテキストによるものなのか、はたまた書写習慣によるものなのかを詳らかにしないが、淵源浅からぬものを感じ取ることができる。

本文への書き入れは、朱墨両様あり、しかし、本文書写時と同時の同筆によるものと思われる。朱は、句点・朱引きにして、墨は薄墨を用いて返り点・送りがな・附訓・縦点・声点である。訓読のあり方は、大勢から言えば、清家本と同系と見られるが、尚、細部に亘っては、置字を読む等、清家本との違いを見ることが出来る。今、「述而篇」を例に取って、清原博士家本（前掲の三十郎盛政本）と比べてみると、

○「述べて作らず」（清家本）「述して作せず」（本書）

○「徳を脩めざる、学を講ぜざる、義を聞きて従うこと能はず、善からざるを改むること能はず」（清家本）

「徳を脩めず、学んで講ぜず、義を聞きて従う能はず、不善を改むること能はざるは」（本書）

○「道をねがひ」（清家本）「道に志し」（本書）

○「執鞭の士といふとも吾亦為ん」（清家本）「執鞭の士といふとも吾亦之を為ん」（本書）

○「威あつて猛からず、恭にして安し」（清家本）「威あつて猛からず、恭しふして安し」（本書）

と言ふような違いが目につく。一概にこれを以てして本書を一家の点本と区分することはできないが、室町時代の郷紳縉流の訓読の変遷を説明するには、いまだ少し緻密な整理が必要とされよう。

旧蔵である京都粟田の青蓮院は、天台宗の門跡寺院。粟田御所とも呼ばれた。鳥羽法皇の第七皇子が行玄大僧正門下となり、比叡山から京都に坊を移し、御所寺院を建立したことから、粟田宮となった。その後、第三世慈円の時に最も栄え、また第十七世尊円法親王の書法は御家流として代々受け継がれた。最近では、『青蓮院門跡吉水藏聖教目録』（平成十一年刊・汲古書院）が編纂されている。

「安田文庫」の蔵印がある。

論語十卷 魏何晏集解 永禄三年（一五六〇）写 高木文庫旧蔵 五冊 斯道文庫現蔵（092/ト1）

本書は、高木利太氏の高木文庫から、安田文庫の有に帰したものである。高木氏は明治四年、昭和八年の人で、慶応義塾の出身。大分中津藩に生まれた。大阪毎日新聞社専務。古版地誌類、古活字版の蒐集は日本随一で、前者は自らが、後者は川瀬一馬博士が整理、それぞれ、『家蔵日本地誌目録』『高木文庫古活字版目録』としてまとめられた。しかし、後に各所に分散し、漢籍の古刊本類はかなり安田文庫に引き継がれた。奥ゆかしい「高木家蔵」の双辺長方の蔵印は、

古活字版の代名詞の如く、今に、威厳を放っている。本書は、『論語善本書影』（大阪府立図書館 昭和六年）の第三十に載せたもので、財団法人大橋図書館が主催した「論語展観目録」の四十六番に著録されている。このときはまだ高木氏の蔵であった。

後補の茶表紙は縹色の元表紙の上に被せたもので、縦二十四・一横十八・五糎。「論語 一」等と後人の墨書がある。首に何晏の序（三丁）があり、「論語学而第一 何晏集解 凡十六章」として本文が始まる。以下同様にして、第七は「論語述而第七 何晏集解 旧凡三十九章／今三十章」第九は「論語子罕第九 何晏集解 旧凡三十一章／皇三十章」第十九は「論語子張第十九 何晏集解 凡二十四章／凡二十五章」と題す。尾題は「論語卷第一 經一千四百七十字／註一千五百一十三字」等と字数を記す。

四周単辺の墨界に七行十三字、界内の寸法は縦十九・五横十四・七糎。界幅は二・一糎。小字双行。全冊一筆の書写に係り、墨付きは第一冊（卷一〜二）二十七丁、第二冊（卷三〜四）三十三丁、第三冊（卷五〜六）三十五丁、第四冊（卷七〜八）三十八丁、第五冊（卷九〜十）二十六丁。料紙は楮紙。

卷末に「于時永祿三稔 庚／申 五月十七日五十歳 文彦」と書写奥書がある。

本文は、字句の異同から、青蓮王府本と同じ系統に属し、古い書体の文字を多く使用する様子も、王府本と類似するところから、清家本と一線を画す寺院系の伝本とみることができよう。ただ、訓点を比べると、青蓮王府本と同じながら、亦更に清家本の訓方をも参考に附している点は注目に値する。因みに、前掲の「述而篇第七」の同じ箇所の訓点を挙げてみると、

○「述べて作らず」（清家本）「述して作せず」（青蓮王府本）「述して作せず」（本書）

○「徳を脩めざる、学を講ぜざる、義を聞きて従うこと能はず、善からざるを改むること能はず」(清家本)

「徳を脩めず、学んで講ぜず、義を聞きて従う能はず、不善を改むること能はざるは」(青蓮王府本)

「徳を脩めず、学を講ぜず、義を聞きて従(うつる)こと能はず、不善を改むること能はざるは」(本書)

○「道をねがひ」(清家本)「道に志し」(青蓮王府本)「道をねがひ(こころざし/したい)」(本書)

○「執鞭の士といふとも吾亦為(せ)ん」(清家本)「執鞭の士といふとも吾亦之を為ん」(青蓮王府本)

「執鞭の士といふとも吾も亦之を為ん」(本書)

○「威あつて猛からず、恭にして安し」(清家本)「威あつて猛からず、恭しふして安し」(青蓮王府本)

「威あつて猛からず、恭しふして安し(恭にして安し)」(本書)

なお、この訓点書き入れは、本文と同筆の、墨による返り点・送りがな・縦点と朱引きである。永祿の頃は、天文の末、清原宣賢が没して程なくのころであり、清家の学問も宣賢の講義を受けた筋等から、次第に自由に流布して行く時代を迎え、本書の訓点受容も、こうした趨勢と無関係ではないだろう。

「安田文庫」の蔵印がある。

論語十卷 魏何晏集解 室町時代写 高本文庫旧蔵 論語義疏竄入本 二冊 斯道文庫現蔵(092/ト16)

本書も前掲の一書と同じ、高本文庫から安田文庫へ移ったものである。『論語善本書影』(大阪府立図書館 昭和六年)の第三十八に載せたもので、財団法人大橋図書館が主催した「論語展観目録」の五十九番に著録されている。やはり、

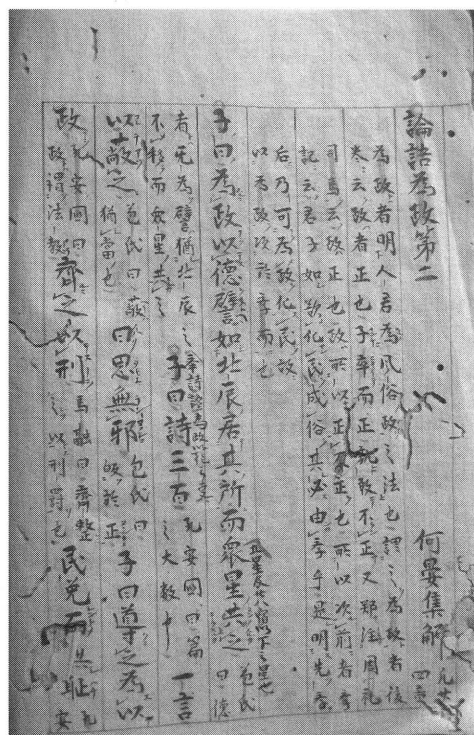


図3 首題に続く3行は義疏本の竄入

正一年（二四六〇）写本が書写年代の明かな前期の古写本で、しかし、南北朝の、例えば建武四年（一三三七）の清原頼元写本（大東急記念文庫蔵）等と比較すると風格に劣勢を感じないわけにはいかなかったのであって、かなり大局的な見方をすれば、十五世紀以降の写本は、室町時代写本として一括するのが無難ではある。永正年間以降、つまり、十六世紀以降は清家本の全盛を迎え、転写に転写を次ぎ、却って奥書年代の明かなものも増えることになるものの、さて、永正大永年間（十六世紀初）の写本と永祿ころ（十六世紀中後）の写本との風格の違いを説明しろと言われても、その明確な答えは探し得ない。室町時代の前中後は、一四〇〇年から一六〇〇年の二〇〇年を三等分するわけであるが、『論語』の書写年代に限って言えば、その分類はあまり意味を持たない。本書について言えば、中期なら永正頃、末期なら

このときはまだ高木氏の蔵であった。その『論語善本書影』の解題には、足利中期の鈔であろう、と述べている。そもそも足利中期、つまり室町時代の中期か末期かと言う書写年代の推定は、比較上の問題で、元奥書が確かなもの以外は確としてその書写年代を決めることはできない。室町時代の『論語』古写本は、慶応義塾図書館所蔵の応永六年（一三九九）写本、前掲安田文庫旧蔵広橋家本応永十三年（一四二六）写本、東洋文庫所蔵の寛

永祿元龜頃を指そうが、その時代の差よりも、むしろテキストの由来にこそ分類の焦点が当てられるべきなのである。乃ち、本書は毎篇の題に続き一篇の趣旨とも言うべき総括文が附されている。これは、日本に伝わる『論語義疏』に附されているものと同一であり、かつ一般の集解本には附されていない一文である。この状況は、前記、青蓮王府本の項においても言及したところであるが、室町時代の『論語』受容の一特徴として、集解本を主としながらも、義疏本の影響を多大に蒙っていることが挙げられ、最も顕著な本書のような一連の写本を「義疏竄入本」として区別することができるのである。『義疏』の現存する写本は多くはないが、室町中期以降の写本が殆どで、義疏・集解両本の平行受容を考えれば、本書の書写も中期以降であることは明白で、細かく書写年代を区切ることには拘る必要は無い。

茶色の表紙（縦二十四・五横十七・八糎）は原装で、前記、三十郎盛政写本と同様に室町当時流行した覆表紙・包背装に仕立てられる。題箋は第一冊が剥落し、第二冊には「論語 自六／至十」と墨書する。第一冊にはまた「百九十八ノ箱」と墨書。いずれも室町期のものであろう。首に何晏の序「論語序」二丁あり。巻頭は、

論語学而第一

何晏集解 凡十／六章

論語是此書総名 学而為第一 篇別目 中間講読／……………

子曰学而時習之不亦悦乎……………

と題し、本文の前に本章の解説を加える。しかし二十篇全てにこれがある。但し、述而第七・顔淵第十二・は「何晏集解 凡幾章」の文字が無い。泰伯第八・郷党第十・先進第十一・微子第十八・子張第十九・堯曰第二十は「凡幾章」の文字が無い。子罕第九は「論語子罕第九 何晏集解 旧凡三十一章／皇三十章」。また、尾題は「論語卷第一」として経注字数を加えるが、「卷幾終」としたり、「卷幾之終」としたり、一定せず、卷三・四・八・九・二十（十の誤り）

は経注字数が無い。墨付きは第一冊（卷一至五）四十七枚、第二冊は四十九枚。料紙は薄手の斐楮交漉紙で、本文は二種類の手跡がある。

こうした写本は、底本を忠実に写す伝写本とは違って、学僧が自己の講読に備え、気取らずに写し取ったもので、台北の故宮博物院に所蔵される、養安院旧蔵の古写『孟子』と甚だ似通った趣きを呈している。気軽に荒く筆を流しているように見えるが、詳細に見つめてみると異体字を含んだ端正な字体と柔らかい筆の動きが感じられ、書写年代を古く設定したい感覚がよく理解できる。

墨書による単辺（縦二十・五横十三・五糧）有界（界幅一・二糧）の紙面に八行二十字、小字双行で記す。書き入れは、朱引き・朱点、墨の返り点・送りがな・縦点・附訓を加え、本文同筆のものと、後に加えたものがあるが、おしなべて本文書写者の訓点本と見られる。その訓方は、前記同様、述而篇を例にとると、

○「述べて作らず」（清家本）「述して作せず」（青蓮王府本）「述して作せず」（本書）

○「徳を脩めざる、学を講ぜざる、義を聞きて従うこと能はず、善からざるを改むること能はず」（清家本）

「徳を脩めず、学んで講ぜず、義を聞きて従う能はず、不善を改むること能はざるは」（青蓮王府本）

「徳を脩めず、学の講ぜず、義を聞きて従（うつる）こと能はず、不善を改むること能はざるは」（本書）

○「道をねがひ」（清家本）「道に志し」（青蓮王府本）「道に志し（したい）」（本書）

○「執鞭の士といふとも吾亦為（せ）ん」（清家本）「執鞭の士といふとも吾亦之を為ん」（青蓮王府本）

「執鞭の士（鞭を執るの士）といふとも吾も亦之を為ん」（本書）

○「威あつて猛からず、恭にして安し」（清家本）「威あつて猛からず、恭しふして安し」（青蓮王府本）

「威あつて猛からず、恭しふして安し」(本書)

ということ、清家本とはやや異なる青蓮院本などと一致することが見て取れる。室町期における『孟子』の古鈔本のテキスト並びに訓読をかつて整理した(斯道文庫論集二十四・二十五、平成二・四)際に述べた結論と同種の結論、乃ち、清家本と寺院系写本の受容の違いがこうした古写本の姿に如実に顕れているものである、とする結論を『論語』の場合においても、頷くことができるのである。「安田文庫」印記を捺す。

五、結語

以上六部の伝本によって知られることは、室町時代の『論語』受容は、博士家清原家の訓法テキストを中心としたものであるが、その受容対象であつた階層が、書物文化の流布から多様化し、校訂訓読に柔軟な変化を組み入れて行つた形跡が見られるのであつて、大衆性・地方性などの観点からも、近世の受容形態を既に裏付けていたとすることができよう。『論語』文献の内容的本源を辿るよりもむしろ、自らの文化に如何に『論語』を融け込ませるか、と努力した当時の知識人の思考形態を知るために存在する資料とも言えるであろう。『論語』は日本人の精神の歴史を担ってきた重要な古典であることを、また物語つているのである。

最後に、安田文庫旧蔵の古鈔本『論語』に永享三年(一四三二)の奥書を持つ一本があつた。『論語善本書影』の二三に所載のものである。今、杳としてその所在が知れない。何時の日か、それは姿を現すであらうか。